

いじめについての研究会に参加して

センター協力研究員（1999年度）（戸田市立健康管理センター副参事） 平 岩 幹 男

平成11年からこの研究会に参加させていただき、改めていじめの持つ様々な面や対応について感じるどころが多くあります。いじめの問題についての私の関わりは、研究という面では平成6年に戸田市で青少年保健行動調査を行うにあたりオランダからの留学生を2名受け入れ、彼女たちの卒業論文のテーマにいじめを選ぶことになったために、いじめについて色々と勉強することになったのが最初です。それまでも思春期相談を行っていた関係から、いじめやそれに関連する相談は数多く持ち込まれており、関心がなかったわけではありませんでしたが、保健行動調査の中でいじめについて調べたところ、予想をはるかに上回る頻度でいじめが存在すること、いじめの被害者と加害者の間の共通性などが明らかになりました。そこから私の専門領域でもある精神保健との関わりが全体として把握できるようになり、これについては既に論文にまとめました。現在は平成11年度に行った第二次調査の解析を行うとともに、数多くの思春期相談に携わっております。

さて研究会に出席して思ったことですが、学校という立場からのテーマが多かったために、いじめを考える背景に常に学級というものが意識されており、学級経営の立場（時には学年でしたが）からいじめを見ていることが私には新しく感じられました。確かに教育の場としての学校は学級という単位によって構成されており、この単位を維持することが構成員である児童・生徒にとっても重要であることは言うまでもありませんが、私たちが行っている思春期相談の場では、あくまで個人が対象であり、個人を取り巻く小集団が見えてくることはあっても学級はなかなか見えてきません。むしろ学校という社会と家庭や家族との因子やそれらの関連が多くの思春期の問題にかかわっているという印象がありました。本研

究会でたびたび取り上げられた学級経営というものが本当にすべての構成員にとって安定と社会性の促進をもたらすものであるかどうかはまた議論のあるところだと思いますが、本研究会で述べられ、実践されてきた努力は想像以上のものでした。ということはそれだけの努力がなければ、理想的な学級経営はできないのかという疑問が湧いてきます。そして報告された努力は結果を伴うものでしたが、結果を伴わない場合もかなりあると思われ、そのようなnegative studyについてももっと触れても良かったのではないかという気がします。多くは公務員である教師に、これだけの努力を要求しなければ理想的な学級経営ができないとすれば、やはり現在の日本の学校のシステム自体に起因する問題が潜んでいると思わざるを得ません。私は教育については専門家ではないので、どこに問題があるのかを正確に指摘することはできませんが、このような学校という社会の中での問題を研究してゆく以上、日本の学校システムの抱えている問題点を明らかにし、必要な提言をおこなうことが極めて大切であると感じられました。

私自身は本研究会に参加するとともに、その間にも思春期相談や学校における講演などをこなしてきました。学校における講演では主に保護者と教師がその対象で、思春期の子供たちの抱える様々な問題、特にこの問題について話してきましたが、本研究会を通じて学校という一つの社会が自己回帰的に独立した社会性を持つ必要があることに気づいたことから、講演の内容も若干変化してきました。また私の所で行っている思春期相談も社会資源の一つとして位置付けるようになり、今後も学校や家庭との連携を計ってゆきたいと考えております。本研究会では数多くのことを学ばせていただきました。